

復命年月日	令和7年12月18日(木)
出張年月日	自 令和7年11月4日(火) 至 令和7年11月6日(木) 3日間宿泊有
用務地	宮城県白石市、幼老統合施設Cocoa(岩手県盛岡市)、岩手県一関市
用務	文教厚生委員会行政視察
てん末 (資料添付)	<p>○宮城県白石市：11月4日(火) 15時～16時30分</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視察テーマ：チーム担任制について ・内容：複数の教員が1つのクラスの担任を分担し、より多角的に児童・生徒の状況を把握する体制が構築されていることについて、経緯、現状等を伺った。 <p>【質問】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 経緯、目的など <ul style="list-style-type: none"> ・チーム担任制を導入するに至った背景や課題、目的は何か。 ⇒教員不足が背景にあった。特に小学校で不足していた。 ⇒産休、育休、病休の補充ができない状況であった。 ⇒教員を孤立させないため。 2. 取り組み <ul style="list-style-type: none"> ・児童数、生徒数、学級数、職員数に応じた学校のチーム編成や人員配置は、どのようにやりくりし、対応しているか。 ⇒小学校でも教科担任制を導入している。 ・担任のローテーション方法をどのように組んでいるか。 ⇒朝の会や給食指導などを、複数の教員でローテーションしている。 ・6年生でのチーム担任制は可能か。 ⇒可能。 3. 連絡・調整・連携(対内、対外) <ul style="list-style-type: none"> ・複数の教員により生徒への指導内容が異なり、生徒が混乱することはないか。 また、生徒が困った時の相談先はどこになるのか。 ⇒学級や生徒に関わる教員が増えるので、生徒の困った様子を早めにキャッチして対応できている。 ・教員の情報共有や役割分担はどのように行っているのか。 ⇒能力やレベルによって負担が違うのを、OJTで指導し続ける必要がある。 ・教員同士の連携を円滑に進めるための工夫や仕組みはあるか。 ⇒同じ児童生徒を担当する教員が、週に1回程度打ち合わせにおいて生徒の情報交換、授業の進度の確認、行事の細部に関する調整をおこなっている。 ・保護者からの相談受付体制は。 ⇒学校の規模によって違う。 ・保護者が子どものことで担任へ相談する際、内容により対応する教員が異なるのか。 ⇒内容によって、異なることもある。

	<ul style="list-style-type: none"> ・学級運営上の意思決定はどのように行っているのか。主担任の位置づけはあるか。 ⇒みんなで話し合って決めている。 <p>4. 成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和7年度からのチーム担任制導入後の成果と手ごたえは。 ⇒子どもの変化に素早く気づき対応できている。 ・制度を導入した際、教員や保護者、生徒からどのような反応や意見があったか。満足度や安心感はどのように変化したか。 ⇒児童生徒からは、いろいろな先生と話せるから楽しい。相談できる先生、頼りになる先生が増えた。教科によって先生が変わるので、違う先生の授業もいいと思う。担任先生が変わるのは新鮮な感じがする。 ⇒保護者からは、いろんな先生に見てもらっているという安心感がある。担任以外の目で、児童の新しい発見や指導していただけるかもしれない期待している。複数の担任がいることで、年頃ならではの悩みを同性の先生に相談できるのでよい。 ・教員負担や児童生徒への効果はどのように出ているか。児童生徒の様子やクラスの運営面で、良いと感じる点は。 ・複数の担任が関わることで、児童・生徒一人ひとりへの理解や支援はどのように深まったか。 ⇒児童生徒とかかわり、多面的な理解、トラブルの未然防止、早期発見。児童生徒の安心感、満足感。授業準備の効率化。チーム対応による教員の安心感。児童生徒を全校で支える意識の向上。初任層のサポート体制の充実。短時間育休や時間年休のスムーズな対応が可能。 ・いじめや不登校、特別支援が必要な生徒への対応にどのような効果があったか。 ⇒いじめ等の重大事案は無い。また、いじめが原因で不登校になった子はない。不登校は、特に低学年の不登校。特別支援も複数人で関わるのでストレス度が低くなった。 ・教員の評価や人事上の仕組みに、チーム担任制はどのように反映されているのか。 ⇒教頭などにコーディネーター役を担ってもらっている。 ・導入にあたり予算や人的配置などの制度的な課題はどう解決したか。 ⇒全てが解決したわけではない。よって、この制度を教職員による評価、児童生徒や保護者からの意見、他校との情報共有をしながらブラッシュアップしていく。 <p>5. 課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・導入後の課題は何か。 ・教職員が感じる課題はあるか。 ⇒非常に必要な情報共有の時間の確保。時間割の調整。業務分担や組織対応に慣れていない教員の理解や習熟など。 ・児童生徒とのコミュニケーション等が減り、関係性が希薄にならないか。 ⇒ならない。どちらかというと増えた。 <p>6. 今後</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後の課題や改善したい点、他自治体へのアドバイスがあればご教示ください。 ⇒令和6年度から教育改革3.0に取組み、量から質へ改革している。また、保育園をこども園化し、教育部局に移行した。
--	---

	<p>○幼老統合施設Cocoa（岩手県盛岡市）：11月5日（水）14時30分～16時 視察テーマ：幼老統合施設Cocoaについて 内容：「子どもから高齢者までみんな健康でいきいき笑顔！」をテーマとした、保育園・児童クラブ・デイサービスの複合施設の運営事業体、補助金内容、施設内見学</p> <p>【質問】</p> <p>1. 経緯、目的など</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼老統合施設Cocoaを設立した経緯や背景にある地域課題は何か。 ⇒少子高齢化が急速に進む日本において、岩手県も例外ではなく、働きながら子どもを育てる環境が十分に整備されていない状況であった。特に当協会のある盛南地区は待機児童が多いとされており、保育園と学童保育共に待機児童の解消が不可欠であった。また同時に高齢者問題も様々な問題を惹起しており、予防重視型の介護事業（デイサービス）に取り組むことを考えた。これらの事業を統合し当協会の独自性を取り入れた「幼老統合ケア事業」を行うことで、幼児・学童にとっては心身の健全な育成が図られ、また高齢者は生きがいなどを含めた健康の保持増進や生活の質を高め健康寿命の延伸につながることを目的として設立した。 ・児童クラブ開設の目的について (保護者にとっては、利用料金が安い公設公営を希望されると思われるが、盛岡市の放課後児童クラブの待機児童が多いのか) ⇒盛岡市では各小学校に公設公営の児童センターが1つずつ整備されているが、児童センターと放課後児童クラブ（学童）は役割や目的が大きく異なる。児童センターは図書館のように場所の提供であるのに対し、放課後児童クラブには生活のお世話という役割がある。また、その他に、児童センターは延長保育（18時以降の預かり）がなく、18時以降の利用が必要な家庭は必然的に放課後児童クラブを選択せざるを得ない。その点は、盛岡市が児童センターの設立を推進する上で差別化を図るために注意しているとのこと。 また時代の流れとともに、安全で安心な環境に預けたい、放課後に何か力を身につけさせたいなどの思いが保護者にあることから、特色作りを行っている放課後児童クラブが選ばれる傾向にあると感じる。 <p>2. 取り組み（運営、経営）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・施設内の1日の流れなど、具体的な活動内容は。 ⇒7時から登園、16時から降園。19時まで延長可。 ⇒別添、当日資料『P2、P4、P5デイリースケジュール』参照 ・世代間交流の具体的な取り組みやプログラムの内容は。 ⇒夏の交流行事（夏祭り）と冬の交流行事（なかよし会）については、行事として開催している。その他に、高齢者は保育園の行事（マラソン大会、雑巾がけ大会、相撲大会、梅干し作り、箸りんピック等）のメダルを事前に作成したり、当日には観覧しメダルを授与したりしている。また、デイサービスのフロアに園児が遊びに行き、一緒の空間で遊ぶ機会も設けている。 児童と高齢者は月に1度の手作りおやつを共同で調理したり、長期休暇中に将棋や折り紙等を一緒に使うなどの交流を行っている。 園児と児童の交流は夕方の時間に園庭で一緒に遊んだり、児童が園児の散歩のお手伝いをしたりすることもある。野菜の収穫なども児童と園児が一緒で行っている。 開設当初は行事として交流を行うことが主であったが、今では自然発生的な
--	--

	<p>交流を目指し同一空間で過ごすことで自然と距離が近づいたり、会話をしたりする交流が生まれるよう、環境設定を心がけている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・異世代バリアフリー、自立・生きがい、伝える情操教育について詳しく知りたい。 ⇒異世代交流のメリットとして、高齢者の生きがいや健康増進、子どもにとつては社会性・協調性・コミュニケーション能力の向上、また自己肯定感の向上などが一般的には挙げられているが、高齢者が子どもたちを見ている時の嬉しそうな笑顔や、時に子どもたちの前では生き生きと立ち上がる姿などを見ると、目に見えて効果を感じことがある。一方で子どもたちの情操など心の部分については、いつどこで表出すかわからないものであり、それらの効果を期待しすぎたり求めすぎではないと考えている。これらの経験が大人になる過程で、または大人になってから、例えば介護に関する仕事や保育士を志したり、高齢者や幼児に対する考えが大らかになったり、または思いやりの心が育まれていたりと、どのような形で現れるかはわからないが、きっと心のどこかでそういった部分が育っていることを信じて取り組んでいる。 ・児童クラブ利用者の送迎を行っているか。 ⇒学区外の学校については、学校へのお迎えを行っている。 ・通所される交通手段はどうされているのか。 ⇒学区内の飯岡小学校の児童は徒歩、学区外の向中野小学校、本宮小学校には、車両を最大4台、その他にタクシーを利用してお迎えに行っている。 ・施設運営に活用している補助金や助成制度の種類と活用方法は何か。 ⇒一般的に保育園、放課後児童クラブ、デイサービスに適用される補助金や助成制度をそれぞれで申請している。活用方法については、それぞれの施設運営に充てているが、例えば、給食室の共用については、開設当初は不可とされていたものを、現在は共用可との回答を得て、共用することができている。幼老統合施設を国が推奨する理由の一つに、人員や施設の共有が挙げられているので、当施設もそれらをもっと推進していくべきだと考えている。しかし、現状、補助金や委託料等については、使途の流用が認められていない。 ・児童クラブは国の放課後児童健全育成事業（運営費補助）を受けられているのか。 ⇒受けている。 ・施設利用料や運営経費の内訳と、持続可能性をどう確保しているか。 ⇒児童クラブの収入は保護者から徴収する利用料と委託料となっており、運営経費の7割強が人件費となっている。 児童クラブは盛南地区という岩手では数少ない児童数が増加傾向にある地区ということもあり、向こう数年は児童減少の懸念は少ない。しかし、学区内である飯岡小については徐々に減少傾向にあり、人数の比率が変わってきている。保育園についても、児童数が増えている地区のため、定員を満たすことができている。 ・施設設置、運営に公費等の補助金があるか（介護サービスや保育所運営に交付されるものを除く）。 ⇒幼老統合施設特有の補助金はない。 ・児童クラブの事業運営は利用料金（月額12,500円他）のみで可能か。 ⇒基本料金の他に、送迎料、延長加算、土曜日利用加算、暖房費、長期休暇加算金などがある。利用料金に加えて市からの委託料（運営費補助）があり、それらを合算した額が運営費となる。 当クラブは、正職員2名、その他10名の非正規雇用で運営をしている。運営費の大半が人件費であることから、どのような形態で雇用するかは重要である。
--	--

	<p>るが、非正規の場合、働き手の確保に苦慮したり、放課後児童支援員の資格者の確保に苦労している。</p> <p>3. 連絡・調整・連携（対内、対外）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運営事業体の組織形態や役割分担はどのようにになっているか。 ⇒運営母体である岩手県予防医学協会は、各種検査・健康診断・健康支援に関する事業を行っている。上記事業と保育、児童の健全育成及び高齢者の介護に関する事業が当協会の事業の2本の柱である。職員の採用や人事労務管理は、総務課で一括して行っている。保育事業、児童クラブ事業、デイサービス事業の事業計画の立案、運営等は、各係が主体となり、幼老統合事業部で行っている。 ・職員の配置や人材育成の工夫（保育士・介護職員・看護師などの連携）は。 ⇒保育士、介護福祉士、看護師、放課後児童支援員等、各施設で必要とされている資格者を適宜配置している。 また、人事交流として職員が他係の業務応援を行ったり、3つの係の職員からなるグループ（食育・運動・世代間交流）を編成し、コミュニケーションが円滑となるよう努めている。 開設当初には係間の連携が少なく、他係への理解が乏しいことから交流のハードルが高いと感じることが多かったが、現在では、職員同士が気軽に連絡を取ことができ、交流がスムーズに行えるようになっている。また、各係の人手が足りない時には、係を越えて応援体制を整えるなど、人員の共有に努めている。今年度は、保育係から児童係へ異動となった指導員がいるほか、過去には産休明けに児童係から保育係へ異動した職員もおり、児童係には保育士の資格を有している職員も在籍している。 ・保育、児童クラブ、デイサービス3機能統合により、スタッフの多様なスキルと人員配置は、どのようにやりくりされているのか。 ⇒前述にも回答した通り、人事交流を行ったり、円滑なコミュニケーションをとることで、それぞれの係の理解を深め、いざという際の人員共有を行えるようにしている。また保育園児の運動遊びを児童係の職員が担当するほか、健康診断部門の職員がデイサービスの利用者に運動指導を行ったり、児童クラブの送迎補助を行ったりと法人全体の職員が資格や得意を活かし、関わっている。今後も分野横断的に業務を行える人材の育成や環境の設定は継続して行っていきたい。 ・児童クラブの職員数について。 ⇒正規職員2名、非正規職員10名のうち、毎日7～8人の指導員を配置している。非正規職員の中には、フルタイム（7時間45分）の指導員が2名、4時間程度の勤務時間の指導員が8名となっている。 ・日常的に、子どもと高齢者が接する際の安全面や衛生面の配慮はどうしているか。 ⇒高齢者と幼児の場合は、各担当がそばについて利用者それぞれに怪我のないように個別対応を行っている。感染症については、特に保育園では基準を設定し、交流を控えるようにしている。新型コロナウイルスが流行した際には、窓越し交流やお手紙、物（利用者による人形の服や雑巾作り等）を介しての交流などで交流の機会を無くさないよう、互いに無理のない交流を行った。敬老会の出し物などはビデオに録画し上映した年もあった。 ・利用者や保護者・家族からの反応や評価はどうか。 ⇒保育園保護者へアンケート調査を行っているが、異世代交流について例年高い評価をいただき、園の良い点として「貴重な経験となっている」「心の発達につながっている」などのご意見をいただいている。また、デイサービスで
--	--

	<p>も「子どもたちとの交流が楽しい」「会話や挨拶が増えた」と子どもとの交流について利用者からよい評価をいただいている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域住民やボランティアの参画はどのように行われているか。 ⇒近年、地域との交流を盛んに行なうことができている。当施設の行事（マラソン大会、敬老会、ハロウィン、発表会など）に地域の高齢者に参加していただくほか、地域の清掃活動に職員が参加したり、地域のゴミ拾いを児童が行ったり、地域の体操教室に当施設の高齢者が参加したりと、地域の方々に当施設の活動を理解していただきながら、幼老交流の良さを共有させていただいている。 <p>特に保育園や児童クラブは隣接する地域の公園を使用させていただいていることから、地域の子どもたちも一緒に遊ぼうという姿勢で行っている。当施設が地域を含めた幼老交流や地域の子どもたちの見守りの中心的役割を担うことを目指している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行政との連携体制や支援内容は。 ⇒幼老統合施設だからという理由で特別なことがあるわけではない。
	<h4>4. 成果</h4> <ul style="list-style-type: none"> ・10年運用してきた成果と継続できた仕掛けや工夫は。 ⇒経営面については、母体である健診事業の収益の力が大きい。運営面については、統合施設として世代間交流を続けてきた過程には様々な糾余曲折があったが、その中で意志の統一や目標を明確化し、職員同士の理解を深めながら試行錯誤し発展させられたことが継続できた理由の一つである。 ・施設運営を通じて、地域の子育て・高齢者福祉にどのような効果が見られたか。 ⇒地域の高齢者が当施設の行事に参加することで、子どもに対する理解が地域全体に広まっているように感じる。地域全体で子育てをしていると感じてくれている方々もいらっしゃるようだ。 <p>また、当児童クラブに通っていない地域の小学生が公園に集まり、児童クラブの子どもや指導員と遊ぶことによって、地域の子どもたちを見守ってくれる場所と思ってもらえているのではないか。今後もその効果を広げていきたい。</p> <h4>5. 課題</h4> <ul style="list-style-type: none"> ・今後の継続推進に向けた課題は。 ⇒デイサービスの利用者増加、ならびに施設全体の利用者数と職員数のバランスの適正化を図ること。 ・保育園・児童クラブ・デイサービスを一体運営する上でのメリットと課題は何か。 ⇒交流を通じた心身の健康や成長は先に述べた通りであり、ハード面においては人員の共有や施設の共用がメリットとなる。課題としては、施設の共用や人員の共有をさらに進め、コストの削減を推進すること。そのために、職員の更なるスキルアップを目指し、分野横断的に業務を行うことを経験したり、資格の取得を推進していきたい。 ・利用者や地域の反応や意見は。 ⇒利用者の反応については上記回答のとおりとなる。地域の反応としては、地域の子育てや福祉、健康をけん引していく施設という認識が徐々に広まり始めているのではないかと感じる一方で、児童数が多いことから、隣接する公園を占領されているように感じているという声もいただいている。 <p>先に述べたように、当施設が地域の子どもたちの見守りの中心となれるよう、地域の子どもたちも交えて一緒に遊ぶことや、時には様子を窺いながら利用</p>

	<p>を控えたり、また地域の活動に積極的に参加するなどしてコミュニケーションを大切に、地域の方々に理解をしていただきながら活動できるよう努めていきたい。</p> <p>6. 今後</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他自治体が同様の取り組みを進める際のアドバイスについてご教示ください。 <p>⇒ハード面：高齢者施設には様々な形態があるが、どのような形態で導入するかによって収益やコストに加え、幼老交流の方法や質が変わってくると感じる。</p> <p>また、施設の共有については、給食室の共有はコストの削減のために効率化を図ることができるため、積極的に検討されたほうが良い。さらには、子どもも高齢者も使用することができる共有スペースがあることで、自然な交流が生まれやすいと感じる。可能であれば靴の脱ぎ履きがなく、それぞれのエリアに行き来ができるような造りが望ましいのではないか。</p> <p>ソフト面：人員の共有を行っていくためにも、それぞれの職員の交流や理解を深めていくことが大切であると感じる。</p>
	<p>○岩手県一関(いちのせき)市：11月6日（木）10時～11時30分 視察テーマ：部活動の地域移行について 内容：休日型と全日型の移行方式を取り入れ、最終的に全日型への移行を目指し、スポーツ少年団との協働もされている。</p> <p>【質問】</p> <p>1. 経緯、目的など</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域移行の導入背景と経緯、狙いは。 <p>⇒市内の児童生徒数は、毎年約300人ずつ減少している現状。そのような中、持続可能な活動を行うことが一番のねらい。他には、地域との連携強化、専門的な指導の充実、教員の負担軽減のため。</p> <p>2. 取り組み（運営、経営）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域移行を進めるにあたり、休日型と全日型をどう位置づけ、段階的に進めているのか。 <p>⇒休日型と全日型の違いを、資料2の項目に沿って説明（活動日、対象、指導者、運営費、保険、中体連大会への参加、管轄）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化部の地域移行はどのように進められているか。スポーツと違い工夫している点はあるか。 <p>⇒文化部の地域移行については、学校施設の防犯管理が課題。担当課と連携し、個別に防犯システムを見直すことで対応している（現在吹奏楽部3団体）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和7年度の学校部活動の地域移行は、全日型地域部活動が9団体、休日型地域部活動が60団体と報告されているが、それぞれのスポーツ系と文科系の内訳または主なクラブ活動内容について。 <p>⇒運動部125部、文科系25部ある。その内、地域部活動は、62団体。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校施設等、活動場所利用料は。 ・費用負担（保護者・自治体・団体）について、どのような仕組みになっているか。 ・財政的な支援策や国・県の補助金の活用状況はどうか。 <p>⇒学校施設等、活動場所について、学校施設の利用可、市施設の利用料を100%</p>

	<p>減免(照明は50%)している。国、県の補助金の活用ではなく、市で独自の補助を行っている(休日型5万円、全国型10万円を上限)</p> <ul style="list-style-type: none"> 令和8年度の完全切り替えを目標とされているが、地域部活動への移行状況は。⇒約41.6%で、令和8年度で移行を完了させる計画でスタートした。 <p>3. 連絡・調整・連携（対内、対外）</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域スポーツアドバイザーとの関わりはどうか。 ⇒地域スポーツアドバイザーの設置は無い。 地域移行推進の人と推進される側の人の乖離の問題解決は。 保護者、児童生徒、地域住民等への説明会などの実績は。また、計画等があるのか。 ⇒年4回開催する校長会の場や、地域部活動に特化した臨時校長会議の場を設け学校と情報共有を行い、学校から保護者や児童生徒への説明を行っている。また、年に1回地域部活動代表者会議を開催、同じく年1回地域部活動説明会を開催し、様々な立場の方々から意見やニーズ、課題を集約し政策に反映している。地域住民への説明会については、昨年度市長部局が各地区で実施。 地域移行の課題として指導者の確保が難しいとされているが、指導者の確保はどうのように行っているか。 ⇒指導者の確保は最大の課題。現在はマッチングや研修等のサポート制度はなく、今後、市長部局との連携の中でスポーツ協会ともつながることを検討中。現在は、育成会の指導者を中心に地域部活動の指導者として登録する仕組み。 スポーツ少年団との協働の具体的な内容や役割分担はどうなっているか。 ⇒中体連の大会でスポーツ少年団として参加できる種目がでてきており、大会運営に学校と同様に関わっている。 生徒や保護者のニーズや意見をどのように反映しているか。 ⇒地域移行については、教員が担当者を担うことで保護者や指導者と学校がつながり、意志を等を把握している。 安全管理や事故対応は誰が担い、どのように体制を整えているのか。 ⇒地域移行した場合、その団体が安全管理や事務対応を行うこととしている。また、デジタル化をして負担の軽減を図っている。 <p>4. 成果</p> <ul style="list-style-type: none"> 教員の負担軽減や働き方改革につながった具体的な成果はあるか。 ⇒休日型・全日型ともに教員の週休日対応がなくなったことで、ワーク・ライフ・バランスがとりやすくなった。 競技力の維持・向上にどのような効果が出ているか。 ⇒競技力の維持向上について成果は把握していないが、専門性のある指導者からの指導が強化された団体はある。 保護者への効果は見られるか。 ⇒制度が浸透し代替わりの引継ぎや、年度当初の登録がスムーズに行われている。一方で、子どもの卒業とともに育成会から保護者も引退する事例が多い。 移行後の子どもたちの活動時間や生活習慣にどのような変化があったか。 ⇒以前から市の部活動方針で子どもたちの生活習慣の形成のため、夜20時以降の活動をしないようお願いしているため、移行前後で変化は認められない。 <p>5. 課題</p> <ul style="list-style-type: none"> 「全日型」「休日型」それぞれのメリットとデメリットは。また、デメリットに
--	--

	<p>対する工夫はどのようなものがあるか。</p> <p>⇒3. 連絡・調整・連携の説明で済み。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の公共施設や民間施設を活用する際の課題と解決策は。 <p>⇒地域の施設を利用する際の課題は、活動場所の予約が取りづらいこと。インターネットで予約するシステムで早い者勝ちとなっている現状。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後、全日型への完全移行を目指す上での最大の課題と展望は何か。 ・休日型と全日型の2形態を推進するには、地域指導者の不足や指導者の負担増の懸念はないか。 ・部活動の種類によって異なると思われるが、地域移行により部活動の部費など保護者負担が増加しているのではないか。また費用負担増を理由に退部される生徒はいないのか。 <p>⇒国の推進においてもこの点が検討されており、全国的な課題ととらえている。現時点 で費用負担増による退部の話は聞こえてこない。</p> <p>6. 今後</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域部活動運営費補助は恒久的に行う方針か。 <p>⇒时限的なものととらえている。市長部局の補助制度の新設に伴い再検討もあり得ると考えられる。</p>
	<p>※ 文教厚生委員会各委員の報告・所感については別紙のとおり</p>

文教厚生委員会行政視察報告・所感 松尾真介

①白石市

学級経営を始め、保護者対応、複数の学級に同じ授業をすることによるスキルアップなど利点が多い。今後、大いに取り入れる手法だと思う。

②盛岡市

認知症の入所者と子どもの接触、触れ合いということで心配していたが杞憂だった。入所当初は無表情だった方が、子どもと触れ合っているうちに笑顔になられたと聞いて感動した。子どもたちも生き生きと過ごしていた。今後の本市の取組みのために非常に参考になった。

③一関市

少子化、教員の働き方改革など問題が山積している。地域移行の取り組み方、費用負担など国や県の支援が必要不可欠だと思った。

文教厚生委員会行政視察

所 感

西田 晃一郎

○宮城県白石市：11月4日（火）15時から16時30分

- ・視察テーマ：チーム担任制について
- ・内容：複数の教員が1つのクラスの担任を分担し、より多角的に児童・生徒の状況を把握する体制が構築されていることについて、経緯、現状等を伺った。

【所感】

まず、教育改革に取組む意気込みに圧倒された。しかし、このくらい危機を感じまた、覚悟と情熱を持って取組む必要性があると感じた。

チーム担任制が、児童生徒の学力向上のみならず、児童生徒の自主性や主体性、能動性や積極性などが育まれ、部活や生徒会活動などの学校生活にまでいい影響を及ぼしていることに感銘を受けた。また、人材不足や人手不足を解消する手法としても効果があり、さらには児童生徒と関わったり向き合ったりする時間が増えたことは、目から鱗が落ちた。

伊万里市においても、取り組む価値は十分にあると考える。

○11月5日（水）14:30～16:00

幼老統合施設 Cocoa（岩手県盛岡市）

視察テーマ：幼老統合施設 Cocoa について

内容：「子どもから高齢者までみんな健康でいきいき笑顔！」をテーマとした、保育園・児童クラブ・デイサービスの複合施設の運営事業体、補助金内容、施設内見学

【所感】

まず、医療が主体となっていることは、幼児や児童、高齢者にとってとても安心な環境を作るために、最大の強みだと感じた。また、制度の壁を無くし、多世代間の交流が生まれる施設を実現させていることに感動した。

保育園では、高齢者のデイサービス利用者との交流があるせいか、園児のコミュニケーション能力の高さを実感した。また、放課後児童クラブの児童たちも大人との接触に躊躇なくコミュニケーションを取ろうとしていた。

こうした多世代間の交流が施設内で生まれ、それが地域住民との交流にも広がっている環境は、地域コミュニティの活性化につながる拠点として大いに有効である。

○11月6日（木）10:00～11:30

岩手県一関市

視察テーマ：部活動の地域移行について

内容：休日型と全日型の移行方式を取り入れ、最終的に全日型への移行を目指し、スポーツ少年団との協働もされている。

【所感】

まず、少子化に対応したり働き方改革などによる教員の負担軽減を図ったりしながら、児童生徒の運動部や文化部の活動を維持していくために、何が必要かという思いに感銘を受けた。

また、行政と学校、地域と家庭が連携して、各方面への連絡・調整が大変ながらも、児童生徒の部活動を持続可能にするために、環境整備を行っている大人たちの姿勢にも感動した。

伊万里市においても対岸の火事ではなく、自分事として取組む必要性を感じた。

文教厚生委員会行政視察 所感

加藤奈津実

○宮城県白石市「チーム担任制」

今年度から本市でも一部導入されているが、初任者の離職率低下、教職員の負担軽減、教材研究の時間確保、チーム全体での問題の共有など、メリットは多いと感じた。

その一方で、今後チーム担任制を取り入れる学校は増えていくと想定されるものの、現在その過渡期であるため、初任者としてチーム担任制からスタートした教員が、学級担任制の学校に異動した場合においては新たな課題が生まれるのではないかと考える。

チーム担任制の実施方法は一つではなく、その学校や学年によって柔軟に組み立てることができるため、様々な方法を模索し、子どもたちにも教職員にも良いあり方を学校現場と共に検討していきたい。

○岩手県盛岡市「幼老統合施設 Cocoa」

デイサービスと保育園の建物がアルファベットの「C」の形で向かい合っていることから、日常的に顔の見える関係が築かれ、自然な交流が生まれることと思う。

コロナ禍においても窓越しに手を振ったり手紙のやり取りをすることで交流ができたことは、両者にとって心の健康のために効果があつただろうと思った。

デイサービスを利用するおじいちゃんおばあちゃんが、保育園の子どもたちを誉めてくれるだけでなく、保育園の先生方にも「頑張ってるね」と声をかけてくださるそうで、同じ空間にいる全ての人にいい効果をもたらしていると感じた。

○岩手県一関市「部活動の地域移行」

部活動の地域移行は何を主軸に置いて進めるかによって、方法が全く異なると考える。

おそらく教職員の働き方改革を目的として始まったと考えるが、子どもたちの体験機会の創出や才能発掘に主軸を置くとしたら、国の支援なしには進めるることは困難と感じる。

本市もそうだが、広大な市有面積を持つ一関市にとって、子どもたちの移動が大きな課題になるだろうと思った。

令和 7 年度 文教厚生委員会 行政視察所感

塚本博幸

1. 白石市議会

複数の教員が 1 つのクラスの担任を分担し、より多角的に児童・生徒の状況を把握する体制が構築されている「チーム担任制」について、経緯と現状等を伺った。

- 1) 数年来の白石市の課題であった、①学力向上、②不登校、③教員不足への改善案として、教育長の強いリーダーシップの下、教育改革元年（R1～）教育改革第 2 ステップ（R4～）、教育改革 3.0（R7～）へと令和 7 年度から小中校 15 学校すべてに「チーム担任制」を導入されていることに感銘を受けた。
- 2) 「チーム担任制」で期待される効果について類々説明を受け、なるほどと理解する一方で、気になる児童生徒や保護者の視点での評価・生声もアンケート結果から良好であるとの説明であった。

以上から、「チーム担任制」は伊万里市でも早期に横展開すべきと感じた。

2. 幼老統合施設 Cocoa

「子どもから高齢者までみんなが健康でいきいき笑顔！」を、テーマとした保育園・児童クラブ・デイサービスを統合した、日本初の幼老統合施設を視察した。

- 1) Cocoa を設立された経緯や背景は、①少子高齢化の急速な進展②働きながら子どもを育てる環境が十分整備されていない③高齢者問題への対応への課題解決との説明であった。

この事は、全国共通の課題であり、施設建設に至った事実は意義がある。ここにも強いリーダーシップを持たれた方がおられ、諸活動を強力に推進されたものと察する。

- 2) 子どもから高齢者まで健康でいきいき笑顔！まさに誰もが願望している事であり、その事を、現地で確認できたことは大変有意義であった。

伊万里で同様の施設建設は難しいが、みんなが健康でいきいき笑顔！は、しっかりと心に刻みたい。

3. 一関市議会

部活動を休日型と全日型の移行方式を取り入れ、最終的に全日型への移行を目指し、スポーツ少年団との協働を実施されている状況を視察した。

1) 部活動は生徒のとって大切な成長の機会である一方で、教職員の長時間勤務となりがちなことから、その是正を図る。

さらに生徒の部活動の加入について、任意を基本としつつも、部活動の教育的意義が大きいことから推奨するとの部活動の在り方に関する方針を打ち出され、その具現化に奮闘されているとの説明を受けた。

伊万里での部活動の実態はどうだろうかと案ずる。

視察を終えて、伊万里の状況を直視し問題・課題があれば、その点を明確にし、必要に応じ改善を模索したいと感じた。

文教厚生委員会行政視察 所感

木寺 智子

宮城県白石市【チーム担任制について】

白石市の教育改革は、現場の課題に丁寧に向き合いながら、人を支える仕組みを大切に育てている点が印象的だった。特に、チーム担任制を教員の働き方改革としてだけではなく 子どもたちの安心や学びの充実につなげている姿勢に、教育行政としての確かな理念が感じられた。制度の根底に「子どもを真ん中に置く」という考えがしっかりとあると感じた。

また、保育から小・中学校までを一体的に見通し、5歳児と小学校1年生の「架け橋期」に力を入れている点も心に残った。子どもの成長に寄り添いながら自然なつながりをつくろうとする取り組みは、大変参考になった。現場の先生方が支え合いながら挑戦している姿は、「人が人を育てる教育」のあり方そのものである。

一方で、得意教科に特化する方向への変化に伴い、教員の授業力や異動時の負担に関する懸念や、優秀な教員に負担が集中する可能性など、今後さらなる工夫が必要と感じられる部分もあったが、それは新しい仕組みを進化させていく中で生まれる前向きな課題であり、実践の積み重ねによってより良い形に育っていくと感じた。限られた人員の中でも、子どもと教員の双方が安心して過ごせる学校づくりを目指す白石市の姿勢は、伊万里の教育を考える上でも多くの学びと気づきを与えてくれた。

岩手県盛岡市 幼老統合施設「Cocoa」

Cocoa は、保育園・児童クラブ・デイサービスを同一敷地で運営し、世代間交流を日常的に組み込んだ全国的にも先進的なモデルであった。特に印象に残ったのは、「交流を“させる”のではなく、自然に交流が“生まれる”環境をつくる」という理念。スタッフが介入せずとも、子どもたちがおじいちゃん・おばあちゃんと自然に関わるその穏やかな空気感。それをつくり上げてきた皆さんのが見えない努力に、大変感銘を受けた。

施設運営においては、保育園・学童・デイサービスそれぞれの法的基準を満たしながら、共用空間を柔軟に活かしている点が素晴らしいと感じた。専用スペース確保、安全導線の確保、お互いの距離感を適度に保つ工夫など、ソフト面においてもハード面においても細部まで緻密に計画・設計されており、理念と現場運営の両立を実感した。さらに、特定の曜日の利用低迷への対策や、年度接続計画など、課題に対しても「データを基に改善を続ける姿勢」が徹底されていた。

説明・質疑応答のあと、それぞれ 3 つのエリアを見学させてもらった際、子どもたちは大人に慣れているのか 向こうから気さくに話しかけてくれた。デイサービスを利用

中の皆さんともひととき談笑し、元気をいただいた。体験したかった素敵な空気感を実際に味わうことができた。

今回の視察を通じ、単なる施設の複合化ではなく、「共に生きる社会」を空間と日常の中で具現化する姿を学ぶことができた。この理念を、地域の実情に合わせてどう形にしていくか—今後の政策検討の重要な視点として考えていきたい。

岩手県一関市【部活動の地域移行について】

一関市の「部活動の地域移行」に関する取組は、国の方針を踏まえつつも、現場課題を丁寧に拾い上げた実践的なものであった。児童生徒数の減少と教員の働き方改革の両立を図る中で、単なる「移行」ではなく、地域と学校が協働しながら新しい育成体制を模索している点に大きな意義を感じた。

今回特に印象的だったのは、学校部活動・休日型・全日型・地域クラブといった多様な形態を明確に整理し、それぞれに適した補助制度・保険・指導者配置を構築していること。資料も大変分かりやすかった。国の体制整備を待つだけでなく市独自の補助制度を進める姿勢や、地区ごとの住民説明会の実施など、丁寧な合意形成も印象的であった。指導者不足が課題となる中でも、全員加入制の見直しや合同チーム編成など、生徒の活動を途切れさせない工夫が随所に見られた。

一方で、指導者の恒常的不足、報酬体系の未整備、施設利用や受益者負担の公平性といった課題は依然として大きい。地域の意欲ある人材を活かす仕組みづくりと、保護者負担を軽減しつつ参加機会を保障する制度設計が今後の鍵となる。伊万里市においても、地域や競技団体との協働を強化し、教員の負担軽減と子どもたちの健全な成長の両立を図る「地域に開かれた部活動」の在り方を、段階的に検討していく必要があると感じた。

文教厚生委員会 行政視察 所感

令和7年11月14日

児玉 不二子

◆令和7年11月4日

宮城県白石市 白石市議会 チーム担任制について

- ・チーム担任制は、教員一人に業務が集中しない働きやすさと、子どもを複数の教員で見ることで、子どもへの多面的な支援の両立を図るための仕組みとして効果があると感じた。
- ・伊万里市でも働き方改革や不登校・個別最適化への対応が求められる中、チーム担任制導入時には、人間関係づくりや研修の充実が必要と感じた。

◆令和7年11月5日

岩手県盛岡市 幼老統合施設 Cocoa

- ・幼老統合施設 Cocoa は、幼児教育と高齢福祉が自然に交わる環境をつくり、幼児と高齢者の双方に生活意欲の向上や情緒安定など双方のよいところが引き出されていると感じた。
- ・理念をしっかりと共有し、職員同士の情報共有や安全面の配慮を丁寧に行っていることが成功の背景にあると感じた。
- ・日常的に地域と関わり一体化していることに価値があると感じた。伊万里市においても、子どもと高齢者が自然に関わり合う拠点づくりは地域の活力につながると考えられ、福祉と教育の連携の可能性を強く感じた。

◆令和7年11月6日

岩手県一関市 部活動の地域移行について

- ・一関市では、国の方針だけでなく教員の働き方改革と地域のスポーツ向上という二つの目的を明確に掲げて取り組んでいると感じた。
- ・行政が調整役となり、競技団体や指導者との協力体制を丁寧に構築していると感じた。
- ・指導者確保や地域間格差、費用負担といった全国共通の課題があると感じた。
- ・伊万里市においても、スポーツ団体の育成や指導者の確保など基盤づくりが重要と感じた。

【白石市】（チーム担任制について）

白石市では、令和6年度に1つの小学校でチーム担任制を導入し、一定の成果が確認できたことから、令和7年度から市内の全小中学校で導入されたとのことで、白石市の教育長の熱意が強くなければ出来なかつたのではないかと感じました。

チーム担任制を導入することでの児童生徒にとってのメリットとしては、複数の教員が多様な視点から見ることができるために一人一人の良さや特徴を捉えることができ、それぞれの児童生徒にあった助言や指導を行うことができる。また教科担任制とすることで、専門性を持つ教員による質の高い授業を受けることができる。

教員にとってのメリットとしては、特異な教科を自信をもって授業することができる、他の教員の指導（授業）を直接見ることで参考となる、教員同士フォローしながら指導ができる、また時間的余裕ができ子どもと接する時間が増えるなどが挙げられる。

また保護者からの意見としても、複数の先生に見てもらえることでの安心感があるとか、子どもに合った指導や話しやすい先生に相談できるのでよいなど期待されているとのことであった。

伊万里市でも既に伊万里小学校でモデル的にチーム担任制を導入し実施されているが、チーム担任制といつても様々な形態があり、各学年に複数の学級がある場合と、各学年が単学級の場合や一部複式学級のところもあり、学校毎に体制を整えることはかなり難しく時間がかかるのではないかと思います。また教員においても伊万里市の学校だけが勤務先ではなく他市町に移動した場合に同じ体制とは限らず、教員にとっても不安があるのでないかと想定されますが、児童生徒にとってのメリットを考えた場合に、チーム担任制の積極的な推進は必要であると認識し、伊万里市でのチーム担任制について議会としても更なる調査研究を進める必要があると感じました。

【盛岡市 幼老統合施設 Cocoa】（幼老統合施設 Cocoa の運営内容について）

幼老統合施設 Cocoa は、公益財団法人岩手県予防医学協会が運営する民間施設で、「岩手県の健康と福祉に寄与する」こと基本理念とし、「子どもから高齢者までみんな健康でいきいき笑顔」をテーマとして、食育・運動・世帯間交流を3つの柱とし、乳幼児・児童・高齢者とともに、心身ともに健康に過ごせることを目的として保育園・児童クラブ・デイサービスの施設を複合的に整備し運営されています。

公共事業とは異なり、事業のプロセス自体が理念に基づく自由な発想から生まれたもので、すべてにおいて参考となるものではないが、現在伊万里市で計画されている市民会館跡地における保育園・子育て施設と高齢者の憩いの場である複合施設の運営や行事の企画等において参考となるところを学ぶことができました。

【一関市】（部活動の地域移行について）

一関市では、部活動の加入については任意を基本としつつ、部活動の教育的意義が大きいことから、推奨すべきもの（加入推奨制）と位置付け取り組まれている。このような中、部活動指導との関係で教員が長時間勤務となりがちなことから、その是正を図る目的で、部活動の地域移行が進められています。現在一関市には、市内 14 の中学校に 150 の部活動があり、その内地域部活動は 62 団体（全日型 7、休日型 55）となっている。

部活動の地域移行については、大きな課題となっているのが指導者の確保である。地域移行の形態として、休日型（平日の勤務時間内は教員が指導し、勤務時間外及び土曜日は地域指導者又は保護者で指導する）と全日型（平日、土曜日すべて地域部活動として地域指導者又は保護者が指導する）があり、地域指導者の確保が出来るところから地域移行を進められている。

また指導者の確保と同時に指導者への謝金等費用の問題も大きな課題となっている。一関市では、指導者への謝金や保険加入費用、地域部活動運営費等保護者負担が増加し地域移行が進まない原因でもあり、地域移行を進めるために、全日型へ年額上限 100,000 円（基本額 50,000+5,000×人数）、休日型へ年額上限 50,000 円（基本額 25,000+3,000×人数）の市単独の補助金を創設し支援されている。

現在、国においては、2023～2025 年を「改革推進期間」と位置付け、休日を中心に地域展開を進められてきた。2026 年から 6 年間で「改革実行期間」とし、平日を含めた取り組みを進め、休日は全面的な実施を目指すとされている。また、地域移行の課題である財源確保についても、超党派の議員連盟が設立され法整備の検討に入ることが伝えられている。

伊万里市においては、中学校部活動の地域移行についての話し合いが積極的にはなされていないように思われる。これまでの総合教育会議においても、部活動の地域移行についての議題が挙げられていない状況にある。一関市や他市町の地域高の取り組みを参考に、議会からも教育委員会への政策提言等を検討し、伊万里市での地域移行の推進を強化していかなければならぬと感じています。